

# いちご「とちおとめ」のランナー増殖法

## 1. 試験のねらい

とちおとめは、女峰と比較してランナーの発生数が少なく、また、ランナーの先端部が枯死するランナー先枯れ症やチップバーンが発生しやすいため、予定採苗時に必要子苗数を確保できず栽培に支障をきたす事例が多い。そこで、ランナーの効率的な増殖法について検討した。

## 2. 試験方法

(1) とちおとめと女峰を用い、親株の定植時期を4月9日と4月25日とし、定植後の保温の有無を組み合わせた4処理を設けた。親株床は雨除パイプハウスを用い、保温区は夕方から翌朝までハウスサイドを閉め、換気は最高気温20～30℃を目標に行った。保温無区はサイド開放で雨除けのみとした。

保温処理は定植後から5月31日まで行い、7月15日に採苗した。

(2) とちおとめを用い、寒冷紗(白#300、遮光率21%)による遮光の有無と親株床の窒素施用量(1.0 kg/a、0.3kg/a)を組み合わせた4処理を設けた。遮光は5月21日から採苗時期まで行った。親株は雨除けしたパイプハウス内に、4月15日に定植し、7月15日に採苗した。

## 3. 試験結果及び考察

(1) 採苗時における総ランナーの発生数は、とちおとめ、女峰のいずれも保温の影響が大きく、保温区で発生数が多かった。定植時期の影響は小さかった。とちおとめの総ランナー発生数は、いずれも女峰より少なく、女峰の半分程度であった(図-1)。

採苗時に仮植可能な適苗(2.6～4.0枚)とセル苗(2.0～2.5枚)の数は、定植時期を早め保温した場合に適苗、セル苗とも多くなった(表-1)。

(2) 採苗時のチップバーンは遮光区で少なく、発生程度も軽い傾向であった。窒素施用量の影響は判然としなかった。ランナー先枯れ症についても遮光区の発生が少なく、窒素施用量が多くなると発生が増加する傾向であった。また、採苗時の利用可能な子苗数は、遮光無・窒素0.3kg/a区でやや少なかった他は処理間で差がなかった(図-2、表-2)。

## 4. 成果の要約

とちおとめのランナー発生数は女峰の半分程度と少ないが、定植時期を早め保温することにより7月中旬の採苗時期に十分な子苗数を確保することが可能である。また、遮光処理により、チップバーンやランナー先枯れ症の発生が軽減される。親株床の窒素施用量は、施用量が多くなるとランナー先枯れ症の発生が多くなることから、0.3kg/a程度で良いと考えられた。

(担当者 栃木分場 稲葉幸雄)

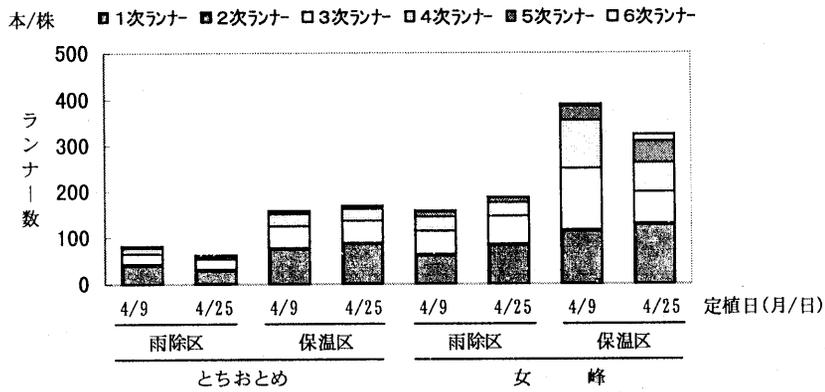


図-1 採苗時(7月15日)のランナー発生状況

表-1 採苗時(7月15日)における苗質別子苗数

展開葉数	とちおとめ				女峰			
	雨除区		保温区		雨除け区		保温区	
	4/9	4/25	4/9	4/25	4/9	4/25	4/9	4/25定植
2.0~2.5枚	14.5	14.1	23.8	16.0	38.3	52.8	98.7	79.3
2.6~4.0枚	21.3	15.0	42.3	20.8	32.3	31.0	82.3	76.7
計	35.8	29.1	66.1	36.8	70.6	83.8	181.0	156.0

表-2 採苗時におけるチップバーンの発生状況(7月15日)

処 理	遮光 窒素(kg/a)	程度別発生率(%)				利用可能子苗数 (本/株)
		軽	中	重	計	
有	1.0	6.4	6.6	4.6	17.6	44
	0.3	8.1	5.6	2.9	16.6	45
無	1.0	9.7	8.5	13.0	31.2	44
	0.3	10.1	10.7	13.3	34.1	39

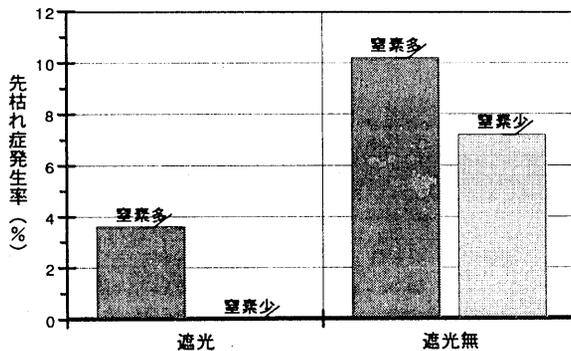


図-2 遮光及び窒素量がランナー先枯れ症に及ぼす影響

注) 発生率は採苗時の総ランナー数に対する積算発生率